

モダリティを表す副詞の類義性と多義性

— 「やはり」、「さすが」、「しょせん」を中心に—

花井 善朗

名古屋外国語大学大学院

Abstract:

The aim of this paper is to present how modal adverbs change their semantic features and come to carry similarities or multiplicities of meaning in sentence. In this paper, the adverbs -“*sasuga*”, “*yahari*”, “*shosen*”, “*kekkyoku*”, “*sukunakutomo*”, and “*semete*” – are analyzed in relation to features in other elements in sentences such as nouns and other modal expressions. Those features, as well as the features of modal adverbs, are analyzed by using semantic distinctive features. This paper argues that when two different modal adverbs carry a similar meaning in different sentences, a feature of another element may function as a key to indicate a difference. For instance, when adverbs “*sukunakutomo*” and “*semete*” appear to have a similar meaning, say, the feature of modal meaning “WISH”, which “*sukunakutomo*” does not usually have but “*semete*” always does, it is interpretable on the basis of other element in a sentence with “*sukunakutomo*”. Similarly, the multiplicity of meaning is correctly interpretable by the combination of the features of adverbs and other elements in a sentence. When the adverb “*sasuga*” carries the modal meaning of “HIGH EVALUATION” in one sentence and “LOW EVALUATION” on the other, each modal meaning is translated on the basis of other elements in the sentence, respectively.

1. はじめに

本研究の目的は、文の中で話者の意見、心的態度(以下、モダリティ)を表すとされている副詞の体系的な分析である。これらの副詞研究は、文末モダリティ形式やムードとの「呼応」、「誘導」、類義語と比較した意味分析などという観点から今までもいろいろと議論されてきた。(山田(1936)、竹内(1973)、中右 (1980)、渡辺(1971)、国立国語研究所(1991)、森本(1994)、森山他(2000)、等) 本研究では、今までの研究を視野に入れつつ、モダリティを表す副詞の体系的分析のための更なる枠組み構築を試みる。その際、副詞が持つモダリティのスコープ内にある各要素の素性を表し、その素性とモダリティとの関係を考えることにより、その副詞のモダリティがより明らかになり、ひいては個別の副詞のみではなく、体系的な枠組みを通じた意味分析に繋がることを提案する。方法論的には、今までの類義語の意味分析と同じ手法を取るが、個々の語そのものの意味的特徴の比較に焦点を当てるのではなく、それらの意味的異同を作り出す条件に注目する。例えば、「やはり」と「さすが」についての今までの

研究では「やはり」と「さすが」は、「話者の考えや、日常的推論体系（西原 1988: 96）に一致する」という意味を持つという点で共通するが、「さすが」は話し手の評価が含まれるという点で「やはり」と異なるとされている。しかしながら、どんな条件下でこれらの語が類似したモダリティを表し、どんな条件下においては類似しないのかということに関しては、あまり触れられていない。また、ある語が多義を持つ時、どのような条件が影響してその多義を作り出すのかということの議論も、あまりされていない。これらの条件をモダリティのスコープ内の要素を持つ素性という形で表すことで、これらモダリティを表す副詞の体系的な枠組みを示すことが可能になると考える。

2. 用語の定義と研究対象

ここでは、今後議論を進めていく上で重要となる「モダリティ」の定義をし、本稿の議論の対象となるモダリティを表す副詞についての先行研究の要点に触れておく。

2.1 モダリティ

モダリティの定義は、今までに多くの学者によりなされているが（Lyons(1977)、中右(1980)、仁田(1989)、益岡(1991)、森山他(2000)、等）、その中身は各定義により様々である。山田(1990 : 1)も、モダリティという名称で呼ばれてきたものが、意味的にも、形態的にも、機能的にも多様なものを含んでいると述べている。本稿では、モダリティを次のように定義する。

モダリティとは、命題に対する話者の意見、心的態度である

これは、Lyons (1977 : 452) の「話者の意見や態度 (opinion or attitude) を表すもの」という定義とほぼ一致する。この定義は、数あるモダリティの定義の中でも、モダリティを広く規定している定義であると言えるが、それはモダリティ表現として一般に最もよく取り上げられている、文末の述部形態に見られるモダリティ形式以外の部分も、文の中で話者の意見や心的態度を表し得るからである。

2.2 研究の対象となる副詞

副詞の分類は、山田(1936)の三分類に始まると言ってよいであろう。山田は副詞を「様態副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」の三つに分類し、話者の気持ちを表す副詞を、

「陳述副詞」とした。その後、渡辺(1971)は、山田の「陳述副詞」に当たる類が、後に続く内容を話者に予測させるという職能を持つことから、それらを「誘導副詞」と名付けた。また、中右(1980)はこの類の副詞を、一般に「文副詞」と呼ばれる副詞として取り上げ、命題との係わりかたから四つに下位分類している。これらの副詞は、それぞれ細かい部分で異なるが、ほとんど同じ類の副詞であると言ってよい。本研究で扱う副詞もこの類に当たるが、これらの用語を使うことによる混乱を避けるため、研究の対象となる副詞を本稿では「モダリティを表す副詞」と呼ぶことにする。

3. 問題提起

まず、次の例文を見てみよう。

- (1) a. さすが田中さん、この問題も解けた。
- b. 田中さんも、さすがにこの問題は解けた。

a.では田中さんに対する賞賛、b.では逆に田中さんへの見縊りが感じられる。このように「さすが」という同一の副詞を使った文が、全く正反対の評価の意味を帯び得るのはなぜであろうか。逆に、異なる副詞が使われているのにも係わらず、似たような評価の意味が感じられる、次のような場合もある。

- (2) a. さすがにカナダのメイプルシロップはおいしい。
- b. やはりカナダのメイプルシロップはおいしい。

上例のような例文に関し、「さすが」と「やはり」は類似したモダリティ表現であるという説明はよく見るが、次のような例では、類似したモダリティは全く感じられないため、この説明だけでは「さすが」と「やはり」の説明は十分とは言えないだろう。

- (3) a. さすがに今日の練習は疲れた。
- b. やはり今日の練習は疲れた。

先行研究に目を向けても、この疑問に対する答えは得られないように思われる。例えば、渡辺(1971)の分析に従えば、「さすが」は注釈誘導の一群に入り、(1)は「この問題が解けたのはさすがだ」と言い換えられることから、「この問題が解けた」という叙述内容に対する注釈となるのであるが、この分析は、どうしてある叙述内容を同

一の誘導副詞で注釈しているのにも拘わらず、全く正反対のモダリティを帯びるのかということまでは説明してない。

上の疑問への解答の一端として、モダリティを表す副詞の多義性が考えられよう。確かにその副詞が多義を持つならば、叙述内容の違いによって異なったモダリティを表すことは当然であるが、どうして同一の副詞が正反対のモダリティでさえ表し得るのか、またどうしてある副詞があるときは類似したモダリティを表し、あるときは表さないのかということまでは、その語自体の意味分析や多義性という観点からだけでは説明できない。

4. 分析

上の疑問に答えるためには、これらの副詞自体の意味分析に加えて、モダリティのスコープ内にある各要素の素性とモダリティの関係についても考えていかなければならない。

4.1 「やはり」と「さすが」の表すモダリティ

「やはり」と「さすが」の意味分析については、いくつかの先行研究がある。(坂坂(1971)、西原(1988)、深尾(1995)、等) それらを要点的にまとめると、この二語は共に「あることがらが話者の意見や気持ちと一致して」という話者の判断を表すモダリティを持つが、異なる点として、その話者の意見や気持ちの種類が挙げられる。つまり、「やはり」は、話者の意見や気持ちがどのようなものかということに制限がないが、「さすが」の場合は、その意見・気持ちに「程度が甚だしい」という話者の評価が含まれる。これらは、次のように表すことができるであろう。

(4) 「さすが」と「やはり」の表すモダリティ

- a. さすが：程度が甚だしいと話者が思っていることから考えて当然～
- b. やはり：話者の意見や気持ちと一致して～

(3)の例文の意味的な違いは、この意味的差異により説明がつく。a.での「さすが」には「今日の練習は程度が甚だしくきつかったので、当然疲れた」という気持ちが含まれるのに対して、b.の「やはり」は単に「予想通り疲れた」ということを表しているだけである。

4.2 モダリティを表す副詞と他要素との関係

上で、「さすが」と「やはり」が異なるモダリティ表現であることを見たが、(2)では前述の通り、この二語から類似したモダリティが感じられる。どうしてこれらが類似したモダリティを表し得るかを議論するためには、これらの語の意味分析に加えて、モダリティのスコープ内にある要素が持っている素性にも目を向けなければならない。ここで、もう一度、例文 (2)を見てみよう。

(2) a. さすがにカナダのメイプルシロップはおいしい。

b. やはりカナダのメイプルシロップはおいしい。

(2)の例文における a. 「さすが」、b. 「やはり」のモダリティのスコープは、その文の命題「カナダのメイプルシロップがおいしい」すべてである。ここで注目しなければならないのは、命題内の「カナダのメイプルシロップ」が持つ素性である。「カナダのメイプルシロップ」がおいしいことで有名なのは、多くの人に認知されている事実である。これを言い換えれば、「カナダのメイプルシロップ」が持つ素性の一つは「程度が甚だしくおいしい」であると言うことができ、これは「さすが」が表す「程度が甚だしい」という話者の評価と共通する。(2)の文で「やはり」が「さすが」と類似したモダリティをかもし出しているように感じる理由はこれである。つまり、「やはり」の表す「話者の意見や気持ちと一致して」というモダリティと「カナダのメイプルシロップ」が持つ「程度が甚だしくおいしい」という素性が組み合わさることで、「さすが」の「程度が甚だしいと話者が思っていることから考えて当然」というようなモダリティを表すことになるのである。これは、次のように書き表すことができる。

(5) (2)の文におけるモダリティと素性

a. さすがにカナダのメイプルシロップはおいしい。

「さすが」: [+ モダリティ]

[モダリティ]:

+	判断
+	前提との一致
+	評価
+	甚だしい程度

b. やはりカナダのメイプルシロップはおいしい。

「やはり」: [+ モダリティ]

[モダリティ]: $\left[\begin{array}{l} + \text{ 判断} \\ + \text{ 前提との一致} \\ - \text{ 評価} \\ - \text{ 甚だしい評価} \end{array} \right]$

「カナダのメイプルシロップ」: $\left[\begin{array}{l} + \text{ 評価} \\ + \text{ 程度が甚だしい} \end{array} \right]$

ここでモダリティの内容と要素「カナダのメイプルシロップ」の持つ素性を同じ[]で表したのは、要素の素性が、モダリティを決定する上で、モダリティの内容と大変似た働きをするためである。また []で示したものは、概念レベルでの表示である。

上のような弁別的素性を用いた分析は、ある語の類似性の詳細を示す上で有効であり、また「カナダのメイプルシロップ」: [+ 評価]のように、他要素の素性をモダリティの内容と同等のレベルで表すのは、それらの文が実際にどうして類似したモダリティを表すのかを示す上で有効であると考えられる。例えば、(5)の場合は、「さすが」と「やはり」は、前提との一致を表すという意味において、[+ 判断]という点では同質であるが、甚だしい程度という評価を持つか持たないかという点で[+ 評価]と[- 評価]という違いが見られた。しかし、それに「カナダのメイプルシロップ」という要素の素性が組み合わさることにより、文として同様のモダリティを表していた。

他の例として、類似表現とされる「少なくとも」と「せめて」を見てみよう。この二語は、次のように表されると考えられる。

(6) 「少なくとも」と「せめて」

a. 「少なくとも」: [+ モダリティ]

[モダリティ]: $\left[\begin{array}{l} + \text{ 判断} \\ + \text{ もっと多いかもしれない} \\ - \text{ 願望} \\ - \text{ 最悪でも} \end{array} \right]$

b. 「せめて」: [+ モダリティ]

[モダリティ]:	+ 判断 + もっと多いかもしれない + 願望 + 最悪でも
----------	-----------------------------------------

これが表しているのも、(5)と同様、「少なくとも」と「せめて」はモダリティ表現であるかどうかということでは同一であるが、モダリティの内容は異なるということである。ここでの[判断]とは、「もっと多いかもしれない」ということであり、[願望]は「最悪でも」ということである。この分析は、次のような文を考える際に有効である。

- (7) a. 昨日のパーティーには、少なくとも 100 人は来たそうだ。
 b. ×昨日のパーティーには、せめて 100 人は来たそうだ。
- (8) a. 明日のパーティーには、少なくとも 100 人は来てほしい。
 b. 明日のパーティーには、せめて 100 人は来てほしい。

(7)は前日のパーティーに来た人数を単に述べる叙述文である。「少なくとも」には「もっと多いかもしれない」という判断のモダリティはあるが、願望は含まない表現であり、a.は自然な文である。一方、(6)で示したように「せめて」は[願望]を表すモダリティ表現であるため、単に過去に現実した人数を述べる叙述文には不適當で、(7-b)は非文となる。一方(8-b)では「せめて」が適當であり、かつ文として a.と同じようなモダリティを表す。その理由は、次のような分析により理解される。

(9) (8)の文におけるモダリティ

- a. 明日のパーティーには、少なくとも 100 人は来てほしい。

「少なくとも」: [+ モダリティ]

[モダリティ]:	+ 判断 + もっと多いかもしれない - 願望 - 最悪でも
----------	-----------------------------------------

「ほしい」: [+ モダリティ]

[モダリティ]: $\left[\begin{array}{l} + \text{ 願望} \\ - \text{ 最悪でも} \end{array} \right]$

b. 明日のパーティーには、せめて 100 人は来てほしい。

「せめて」: [+ モダリティ]

[モダリティ]: $\left[\begin{array}{l} + \text{ 判断} \\ + \text{ もっと多いかもしれない} \\ + \text{ 願望} \\ + \text{ 最悪でも} \end{array} \right]$

(9)を見ると、a.では、「少なくとも」自体は、願望のモダリティを表していないが、文末の「ほしい」が「せめて」と類似した[願望]のモダリティを表していることがわかる。「ほしい」が表す願望のモダリティは、それ自体が特定の内容を持つものではなく、文の他要素を受けるものであるため、「せめて」が表す[最悪でも]という願望とは異なっているが、文中では、この異なりは、「少なくとも」が表す「もっと多いかもしれない」という意味と「ほしい」の願望モダリティとの組み合わせが、「せめて」が持つ[最悪でも]というモダリティに近い意味を作り出すことにより埋められ、結局 a.と b.が類似した意味合いを帯びるわけである。

このような分析の妥当性を確認したところで、次に、最初に挙げた(1)の例文に対する疑問について考えてみる。(1)の疑問とは、下のような例文においては、「さすが」という同じモダリティを表す副詞を使っているのにもかかわらず、a.では田中さんに対する賞賛、b.では逆に佐藤さんへの見送りという、正反対のモダリティが感じられるということであった。

(1) a. さすが田中さんはこの問題も解けた。

b. 田中さんも、さすがにこの問題は解けた。

これについても、今までの分析同様、「さすが」が表すモダリティと、そのスコープ内の要素の素性を考えるが、ここでのスコープ内の要素の素性は、単語レベルの要素の素性ではなく、命題「田中さんがこの問題が解けた」が助詞によって特徴付けられる意味的な素性である。まずは a.の文に目を向けると、命題が助詞「は」によって特徴付けられる意味は、「他の人はわからないが、田中さんについては（この問題が解

けた)」ということであり、「も」によって特徴付けられる意味は、「(田中さんが、) 他の問題に加えて、(この問題も解けた)」ということである。この二つの組み合わせを考えると、a.の文は、明らかに田中さんの能力の高さを表していると言えるであろう。それに対して、b.の助詞「も」が表すのは、「他の人に加えて、(田中さんもこの問題が解けた)」ということであり、また助詞「は」が表すのは、「(田中さんは) 他の問題についてはさておき、この問題に限っては(解けた)」という意味である。この「も」と「は」の組み合わせから考えて、この場合、田中さんは低い能力を表す基準として使われていると考えられる。これは、どちらかの助詞を入れ替えた次のような文と(1-b)の文とを比べてみることでより明らかになる。

(11) 田中さんがこの問題は解けた。

(12) 田中さんもこの問題が解けた。

(11)では「も」を「が」に入れ替えた文であるが、こうなると(1-b)とは逆に、田中さんの高い能力を表しているとさえ感じられる。これは、「が」が「(この問題が解けたのは) 他の誰でもなく田中さんである」という意味を表すからであろう。また(12)は、「は」を「が」に替えたものであるが、これは「他の人に加えて、田中さんについてもこの問題が解けた」という叙述文であり、ここには能力の有無を表す意味合いは感じられない。このことから考えても、前述の通り、(1-b)では田中さんは低い能力の基準として扱われている。そして、「低い能力の基準を表す田中さんもこの問題は解けた」という文が表すのは、この問題の難易度の低さということになる。これらは、次のように表すことができる。

(13) (1)の文における素性

a. さすが田中さんはこの問題も解けた。

「田中さん」: [+ 高い能力]

b. 田中さんも、さすがにこの問題は解けた。

「田中さん」: [+ 低い能力]

「問題」: [+ 易しい]

(1)の文は、それぞれ上のような命題の素性と、(4)に記した「さすが」の表すモダリティ「程度が甚だしいと話者が思っていることから考えて当然～」が組み合わせされた

ものである。つまり a.の場合は、「甚だしく高い能力を持っている田中さんは当然この問題も解けた」となり、これは明らかに賞賛を表す。

一方、b.の場合は、「甚だしく低い能力を持っている田中さんも、当然この問題は解けた」という解釈は適当ではない。これは、b.の文では、田中さんは低い能力を表す基準として使われているだけであり、「能力が低いから問題が解けた」という意味を表しているわけではなく、「能力の低い田中さんが解けるほど、この問題は易しかった」ことを意味しているからである。つまり、(13-b)で示した素性で優位なのは「問題」:[易しい]であり、「田中さん」:[低い能力]ではないということになる。これが「さすが」のモダリティと組み合わせると、「能力の低い田中さんでも当然解けるほど、この問題は甚だしく易しかった」という意味合いを帯びるのである。これは、次のような例と比べることによって明らかとなる。

(14) さすがに山田さんは、この問題も解けなかった。

この場合、「は」は「他の人についてはさておき、山田さんについては（この問題が解けなかった）」ことを、また「も」は「(山田さんは) 他の問題に加えて（この問題も解けなかった）」ということそれぞれ表しており、この二つの組み合わせを考えると、(14)の文は明らかに田中さんの能力の低さを表している。つまり、この場合は(13-b)と異なり「能力が低いから問題が解けなかった」ということを表しているわけである。この場合にも、(13-b)で示したものと同じ二つの素性を持つということができるが、文が「能力が低いから問題が解けなかった」という意味を表していることから、ここで優位なのは、「田中さん」:[低い能力]であると言うことができる。これに「さすが」のモダリティを組み合わせると、「甚だしく能力の低い山田さんは、当然この問題も解けなかった」という解釈が妥当となる。なお、ここで(1)の疑問に答えるために指摘しておきたい点は、(13-b)の場合でも、(14)の場合でも、山田さんを低い能力の基準として扱っている限り、甚だしさがどちらに付いたところで、山田さんに対する見縊りを表していることに変わりはないということである。(素性の優位性については、プロミネンスの位置や語順によっても変わってくるため、更なる議論が必要であるが、大きな問題であるため、改めて論じることにし、本稿では扱わない。)

4.3 「しょせん」の表すモダリティと他要素の素性との関係

「しょせん」は、「結局それ以上ではない」という話者の否定的評価を表すモダリティ表現であり、次のように表すことができる。

(15) 「しょせん」: [+ モダリティ]

[モダリティ]:	+ 判断 + 否定的評価 + 結局それ以上ではない
----------	---------------------------------

ここで、類義語とされる「結局」についても見てみよう。「結局」は、次のように表される。

(16) 「結局」: [+ モダリティ]

[モダリティ]:	+ 判断 - 否定的評価 - 結局それ以上ではない
----------	---------------------------------

「しょせん」と「結局」は、判断を表すモダリティ表現であるという点で共通するが、「しょせん」に「結局それ以上ではない」という評価のモダリティが存在するのに対して、「結局」には存在しないという点で異なっている。

ここで注目されるのは、「しょせん」の評価のモダリティの中に、類義語とされる「結局」が、モダリティの内容として存在するという点である。つまりこれは「しょせん」が「結局」の意味を、その評価のモダリティの内容の中に有しているということを表している。言い換えれば、「結局」にそれ以上ではないという否定的評価のモダリティを組み合わせることによって、「しょせん」の表す意味が作られるということになる。これは、次のような文を説明するのに有効である。

(17) a. しょせん、私はだめな人間です。

b. 結局、私はだめな人間です。

(17)で a. と b. に似たような評価の意味が感じられるのは、「だめな人間」が否定的な評価の素性を有しているからである。「だめな人間」が持つ素性と「結局」の意味の組み合わせにより、「しょせん」が持つ結局それ以上ではないという否定的評価を含

んだ判断と同じような意味合いをかもし出すわけである。また、評価の素性を持ち得るのは、「だめな人間」のような語のレベルに限られるわけではなく、前述 (9-a) のような他のモダリティ表現や、(13) のような文意が持つ素性の場合も考えられる。次の(18)、(19)はそれぞれその例である。

(18) a. しょせん、私の個人的な考えに過ぎない。

b. 結局、私の個人的な考えに過ぎない。

(19) a. しょせん、私にはこの問題もできない。

b. 結局、私にはこの問題もできない。

(18)では、文末モダリティ表現「過ぎない」が、(19)では、「他の人はさておき、私に関しては、他の問題に加えてこの問題もできない」という文意が、それ以上ではないという否定的評価の素性を持ち合わせているため、文として、類似した意味合いを帯びることになるわけである。

逆に、文中に否定的評価の素性を持つ要素が存在しない文では、「しょせん」と「結局」を使った文が同様の意味合いを持たないことになるはずである。次の例文を見よう。

(20) a. しょせん、彼には勝てなかった。

b. 結局、彼には勝てなかった。

文中「彼には勝てなかった」には、否定的評価を表す素性は存在しない。この場合、a.では自分に対するあきらめのような否定的な評価が感じられる一方、b.ではそのような否定的な評価は感じられない。これは、次の例文(21)で、a.では「しょせん」で自分は結局それ以上ではないという評価を表しているため、後に「次は勝てるだろう」とは言えないが、b.では「結局」はそのような評価を表しているわけではないため、「次は勝てるだろう」と言えるということからもわかる。

(21) a. ×しょせん私は彼には勝てなかったが、次は勝てるだろう。

b. 結局私は彼には勝てなかったが、次は勝てるだろう。

4.4 「さすが」と「しょせん」

ここでは、「さすが」と「しょせん」の共通点について見てみる。前述の通り、「さすが」と「やはり」は類語としてよく取り上げられているが、そこに「しょせん」が入れられることはなかった。しかし、今までの議論を考えてみると、「さすが」と「しょせん」はモダリティ表現として、次のような共通点を持つということがわかる。

(22) 「さすが」と「しょせん」のモダリティ

モダリティ：
$$\left[\begin{array}{l} + \text{ 判断} \\ + \text{ 評価} \end{array} \right]$$

それぞれの語が表す判断、評価は異なっているにもかかわらず、このように判断と評価のモダリティを共に有している副詞には、談話上、次のような類似した機能が見られる。

(23) A：えっ、もう学生の成績の処理、終わったの？

B：うん、だって点数さえ打ち込めば、コンピュータがやってくれるから。

A：そうか、さすがコンピュータ。

(24) A：コンピュータって、すごい便利だよ。

B：そう？しょせんコンピュータじゃん。

(23)、(24)の最後の文は、共にそれぞれの副詞と名詞「コンピュータ」だけという形であるが、その副詞自体が評価のモダリティを含んでいるために、話者の「コンピュータ」に対する評価を十分に表せるわけである。このように、判断と評価のモダリティを有するという種類に属する他のモダリティを表す副詞として、「たかが」、「どうせ」などが挙げられる。

(25) A：昨日のパーティーの会費、高かったねー。

B：そう？たかが五千円じゃん。

(26) A：今日のパーティー、どんな人が来るのかな。楽しみだね。

B：どうせ田中さんとその友達でしょ。

これらの副詞の判断、評価の内容はそれぞれ異なり、「さすが」と「しょせん」に代表されるように、意味的には類似しているとは言えないが、文中での働きとして、判

断と評価のモダリティを持ち合わせることによって、命題の一部に対する話者の評価をその語自体が十分に表すという機能を持つという点で類似していると言ってよいであろう。

5. まとめ

本稿では、副詞の表すモダリティと、モダリティの範囲内に存在する要素の素性を中心に議論を進めた。ある二つのモダリティを表す副詞が、文中で類似したモダリティの意味合いを表すときは、それらのモダリティの内容を弁別的素性で表すことで、何が類似し、どの点で相違しているのかを表すことが可能となる。そのモダリティの内容と、モダリティの範囲内にある要素の素性との組み合わせを考えることで、文中で類似したモダリティの意味合いをかもし出す理由を表すことができると考えられる。また、同一の副詞が多義を表す場合も、そのモダリティと、範囲内の要素の素性の関係で説明することが有効であると考えられる。

参考文献

- 板坂元 (1971) 『日本人の論理構造』 講談社
国立国語研究所 (1991) 『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』 大蔵省印刷局
竹内美智子 (1973) 「副詞とは何か」 『品詞別日本文法講座 連体詞・副詞』 71-146 明治書院
中右実 (1980) 「文副詞の比較」 國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第2巻文法』 157-219 大修館書店
西原鈴子 (1988) 「話者の前提 — 「やはり (やっぱり)」 の場合」 『日本語学』 Vol.7, 89-99 明治書院
仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 1-56 くろしお出版
深尾まどか (1995) 「副詞「やはり」「やっぱり」について」 『南山日本語教育』 25-49 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
森本順子 (1994) 『日本語研究叢書 7 話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版
森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』 岩波書店
山田小枝 (1990) 『モダリティ』 同学社
山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館
渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房
Lyons, J. (1977) *Semantics*. Vol.2. Cambridge: Cambridge University Press.